

2022年度

# 愛知の国語教育

(第58集)

## も く じ

I	はじめに	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	5
1	指導事例	5
2	第72次教研のまとめ	
(1)	読み方教育	9
(2)	つづり方(作文)教育	10
(3)	言語・音声表現の教育	11
IV	終わりに	12

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会国語教育部会

2022年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

### ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
◎澤野佑輔	名古屋	引山小	○関戸亮太	春日井	大手小	生駒大典	岡崎	六名小
○杉浦加代子	名古屋	藤が丘小	仁科真由美	尾北	古知野中	松本賢治	みよし	南中

### 第68次～第71次教育研究全国集会レポート提出者

第68次			第69次			第71次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
舘 純子	名古屋	汐路小	森川雄介	春日井	味美中	川嶋大介	名古屋	名東小
後藤佑介	名古屋	大須小	蛭川義之	一宮	大徳小	小山和哉	豊田	寿恵野小

第72次教育研究全国集会レポート提出者 千田多久萌 (尾北・東小)

川瀬賢太郎 (名古屋・西山小)

## I はじめに

教育研究愛知県集会在、愛知県産業労働センターにおいて、盛大に行われ、ここに愛知の国語教育第58集をつくることができました。とりわけ、教育研究愛知県集会の正会員になられた先生方の真摯で熱意あふれる取り組み、その取り組みを支え、温かく励ましてくださった分会・地域の先生方や父母の方々に感謝いたします。

これまで愛知の教研活動(国語教育)では、目の前の子どもたちを見据えた実践を積み重ね、数多くの教育的財産を築いてきました。その中心となるのは、ことばの教育を通して、認識諸能力をのばしていく、つまり「人間形成を目的としたことばの教育」という考えです。

学習指導要領では、答えのない時代を生き抜く資質・能力を高めるべく、「深く人間的な学び」「創造的・論理的思考力」がとりわけ重視されています。また、より一層系統的に学習内容をとらえ、すべての教科のベースとなり、子どもたちにこれからの時代に必要な「ことばの力」を身につけさせることが肝要となってきます。一方で、子どもの「主体的・対話的な学び」の重要性や、学びの必然性や意義をふまえた授業構想、学習過程もこれまでと変わらず重要です。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」が、これからの教育には欠かせません。さらに、一人一台端末が本格的に導入され、ICT機器を取り入れた授業についても考えていかなければなりません。

しかし、教育現場においては、何とかよい授業ができないものかと、教員が日々悩みながら奮闘している一方で、言語活動が重視されるあまり、本来、活動を通して身につけさせなければならない「ことばの力」がおろそかにされている実態があります。また、教員同士が、教育の理念や留意事項といった経験値を伝えるための時間や環境が乏しくなっているという現状もあります。

限られた時間の中で、深く、質的に高い学びを行うためにも、国語科の授業で何を行い、どう評価するのかという視点をもつことが大切です。

そこで、そのようなゆたかな学びにむけて、国語科として大切にしたい観点を以下のように考えました。

### ○「基礎・基本」

国語教育では、4つの領域と言語事項のそれぞれの学習において、特に言語活動を重視しながら子どもたちのことばの力を育成していく。「読むこと」の学習では、想像力を育むとともに、ことばが文脈の中でどう使われているのかを考える基礎となるべき語彙力を身につけさせたい。その学びをいかして、「書くこと」「話すこと・聞くこと」などの学習で、自分の考えを発信する基本的な力を身につけさせていきたい。

### ○「生きてはたらく力」

子どもたちがことばの学習を行う際には、学習の中心を担う言語活動の内容が、子どもたちの生活と密接に関係し、学ぶ必要感を感じられることが大切である。それが感じられれば、子どもたちは自然とその学習に魅力を感じ、自分自身で課題を見つけ、身につけたことばの力を活用して課題を解決していこうとする。そのためにも、教材と実社会や実生活とのかかわりに重点を置きながら、学習を進めていきたい。

今こそ、新しい教育の時流をふまえつつも、不易と伝統に関わる「守るべき部分」も新たな視点から検証し、教育課程を自主編成してきた過去の教研活動の実践に学ぶべき時なのではないかと思えます。

この愛知の国語教育第58集が、少しでもその役割を担っていれば幸いです。

## II 研究の経過

### 1 読み方教育

#### (1) 文学的文章の読み方教育

ア 人間性と人間の生き方を探究する。	(人間の本質)
イ 現実に対処し、変革していく力をつける。	(社会の本質)
ウ 思考力、認識力を育てる。	(認識諸能力)
エ 豊かでみずみずしい感性を育てる。	(豊かな感性)
オ 日本語についての知識を豊かなものにする。	(言語的側面)
カ 文学を正しく鑑賞する力を育てる。	(鑑賞する力)

読み方教育がめざすものとして、上記の六つの目標が確認されてきた。そして、これらの目標を達成するための教材選択の視点として、次の3点があげられている。

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| ・ 作品の構造が緻密で、筋の展開に必然性がある。 | (形象性) |
| ・ 人間がいきいきと描き出されている。      | (思想性) |
| ・ 感動の質が高いものである。          | (教育性) |

この視点を具体的な文章で問い直し、自ら選んだ教材を見る目を育てていくことが大切であることが確認されている。また、選定した作品において、教材としての価値を具体的な表現にもとづいた言語面から明確にしていくことが求められている。

文学作品を「読む」ことを、作品の中に書かれていることば一つ一つを大切に、語句の意味、場面での使われ方、文と文とのかかわりなどから読み取れるイメージをふくらませ、「確かに」そして「イメージ豊かに」読んでいくことだと考える。イメージをことばにし、他者と意見の交流をしていくことによって、児童・生徒の頭の中に世界が明確に浮かび上がり、同時に作品のおもしろさ、豊かさが広がっていくはずである。

#### (2) 説明的文章の読み方教育

説明的文章では、「ことばと結びつけて認識諸能力を育てる」ことをねらいとしている。自然・社会・人間を含む現実についての認識を得させたり、現実のあるべき姿や現実の中の人間としての生き方を考えさせたりする過程で、ことばと結びついた認識諸能力(感覚・思考力・想像力など)をのばしていく。

そこで、このねらいを達成するための視点として、次のことが確認されている。

- |                                       |
|---------------------------------------|
| ・ 正しい認識の上に立ち、わたくしたちの生命を尊重する立場で書かれている。 |
| ・ 厳密なことば遣いで、論拠となるべき事実が十分に提出されている。     |
| ・ 段落構成が適切で、論理展開に無理や矛盾がない。             |
| ・ 児童生徒を取り巻く状況や発達段階をふまえている。            |

説明的文章の中のことばや表現には、それに対応する事実や認識のあり方が存在する。そうしたしくみを読み取ることを通して、認識諸能力をさまざまに働かせ、表現されていることを具体化して考えることが大切である。また、教材を読む過程を通して、書き手の論を自分の考えと比較したり、自分の知識や経験に照らし合わせたりすることも大切である。さらに、内容の読み取りだけにとどまるのではなく、説明的文章を情報理解や構成、発信のモデルとして読み取らせていくことも求められている。特に、指導においては論理的な情報理解や発信のために、主張と根拠、意見と具体例、論理的な段落構成、表現上の工夫などの焦点化が望まれる。その上で、個性的で豊かな情報発信にむけての位置づけと評価を考え合わせていく。

## 2 つづり方（作文）教育・音声表現の教育・言語の教育

### (1) 何のために何を

愛知の教研では、これまでに「人間形成にかかわる側面と言語の技術的側面は、一体化してのぼしうる」ことが確認され、認識と表現の統一をめざしてきた。知識ばかりをつめこんだ人間ではなく、心の発達の間でも調和のとれた人間を育てることが大切である。そのために、身の回りの自然や社会、人とのかかわりをいろいろな視点から見つめてものの見方を深め（認識する）、ありのままに書いたり話したりする力（表現する力）を高めていかなければならない。また、書いたり話したりする活動には伝える相手が必要不可欠である。「何のために伝えるのか」「誰に伝えるのか」といった目的意識や相手意識をはっきりさせるための手だてや支援の方法を考え、書いたり話したりする活動への意欲を高めていくことが重要である。

### (2) 何をどのように

#### ① 作文教育

作文は「事実を書く」ことが大切であると考え。昨今、人間関係の希薄さが叫ばれているが、今後子どもたちはより高度な情報化社会を生きていくことになる。事実とは、そのような子どもたちが日々直面する事実のことであり、「事実を書く」とは、子どもたちが身の回りの自然や社会、人とのかかわりをありのままにとらえ、自分とのかかわりをありのままに書くことである。また、書きたいことを整理するために思考ツールを用いることが有効である。自分の考えを広げたり、相手に伝えたい情報を取捨選択したりするための手段として使い、子どもたちがより豊かに表現することができることをめざしていかなければならない。

《選材・取材》	子どもが本当に書きたいことが価値ある題材になる。文の中に書き手の姿が表れるようなものにする。
《構想》	自分の書きたいことを整理し、構築するだけでなく思いを膨らませる。
《推考》	表現したいことが作文に表現されているかを読む。
《鑑賞》	互いの考え方の違いを知り、理解し合うことが認め合うことにつながる。

#### ② 音声表現の教育

音声表現は、文字言語にはない特性（即時性・断片性・流動性・集団思考性）を生かして「認識と表現の統一」をめざす。そのためには、話したり聞いたりすることによってものの見方、考え方、感じ方が深まるような実践を行わなければならない。話し合い活動を通して、自分の思いを場や状況に応じてきちんと伝えられる力、相手の言いたいことをくみ取って聞く力を培うことが重要である。それが、互いを認め合い、思いやる子どもを育てることにつながる。話し合いの内容を深めるためには、話さずにはいられない状況をつくる必要がある。また、思いや考えを引き出すには、楽しい活動をめざして、流動性（相手の反応に応じて表現することができること）を重視するべきである。評価は、それを子どもの成長にどう還元するかを大切に、「何のための評価か」を明らかにしなければならない。

#### ③ 言語の教育

文字・文法・語彙・発音などの言語教育では、「日本語についての科学的・体系的な知識を身につける」ことをめざしている。ことばの構造や体系を知識として一方的に教えるのではなく、発見の喜びや過程を大切にすることが重要である。そして、日本語の性質や体系を生かした指導法の工夫をすべきである。特に他国籍の子どもたちへの言語指導では、実態を的確にとらえ、語彙を増やすことや文の並び替えることなど、段階的な指導を意識していかなければならない。

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 指導事例

研究主題 児童の「読みたい」を追究する「雪わたり」の学習

##### (1) 研究のねらい

令和3年1月の中央教育審議会答申において、義務教育のめざすべき姿の一つとして、「児童生徒一人一人の資質・能力を伸ばすという観点から、新たなICT環境や先端技術を最大限活用することなどにより、基礎的・基本的な知識・技能や言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の確実な育成が行われるとともに、多様な児童生徒一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高めやりたいことを深められる学びが提供されている。」と示された。答申以前より、本部会では、児童生徒一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高め、やりたいことを深められる学びの提供について研究している。

本実践では、近年導入された一人一台端末を活用し、児童が自分の「読みたい」という思いにもとづいて追究する課題を選び、友達と協働しながら読む学習を行った。

##### (2) 研究の方法

① 単元 小学5年『雪わたり』の魅力を紹介しよう (教育出版5年)

##### ② ねらい

ア 比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。 (知識・技能)

イ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。 (思考・判断・表現)

ウ 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切に  
して、思いや考えを伝え合おうとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

##### ③ 手だて

ア ICT機器を活用し、表現の工夫や効果を考える活動

5年生1学期の「いつか、大切なところ」では、表現の工夫によって、登場人物の心情がより豊かに想像されることを学んだ。しかし、表現の工夫が情景を美しく豊かに想像させたり、物語を鮮やかに印象づけたりするという、表現の効果について考えることは初めてのため、ICT機器を活用して画像を使い、情景を豊かに想像しながら学習を行う。

イ 個人の課題を設定して追究する、個別最適な学び・協働的な学び

物語の魅力「人物」「話のつくり」「表現の技」という三つの柱でとらえる。また、児童の初読の感想をもとに、三つの柱に沿って追究する課題を設定する。児童は、自分の思う「雪わたり」の魅力について、設定された課題にもとづいて、一人で読んで考えたり、友だちと協働したりしながら追究する。

##### (3) 実践の様子

##### ① 第1時 物語の魅力は何かを考える

今まで学習した物語の中で、印象に残っている物語について振り返った。また、その理由をたずねていった。以下は、授業での児童の発言である。

C1: 「お手がみ」です。(理由を聞かれて) がまくんとかえるくんの関係がすごくいいなって思いました。

T: なるほど、「登場人物」とか、その人物の「相互関係」が印象に残っているんだね。

C2: 「ごんぎつね」です。最初いたずらばっかりしていたごんが、反省して変わっていくんだけど、最後死んじゃってかわいそうだなと思いました。

T: 「登場人物」の「性格」や「気持ちの変化」が印象に残っているんだね。悲しい結末もそうだね。

(他の物語も出てくる)

C3: 「いつか、大切なところ」もよかったです。自分も近い気持ちになることがあるなと思いました。

T: (登場人物に関わる以外があまり出てこないため話を振る) 「いつか、大切なところ」で新しく学んだことって覚えてるかな。

C4: 情景描写! 電車の音の聞こえ方の違いとか、比喩の使い方とか面白かったです。

T: 工夫された表現も、印象に残ることが多いよね。

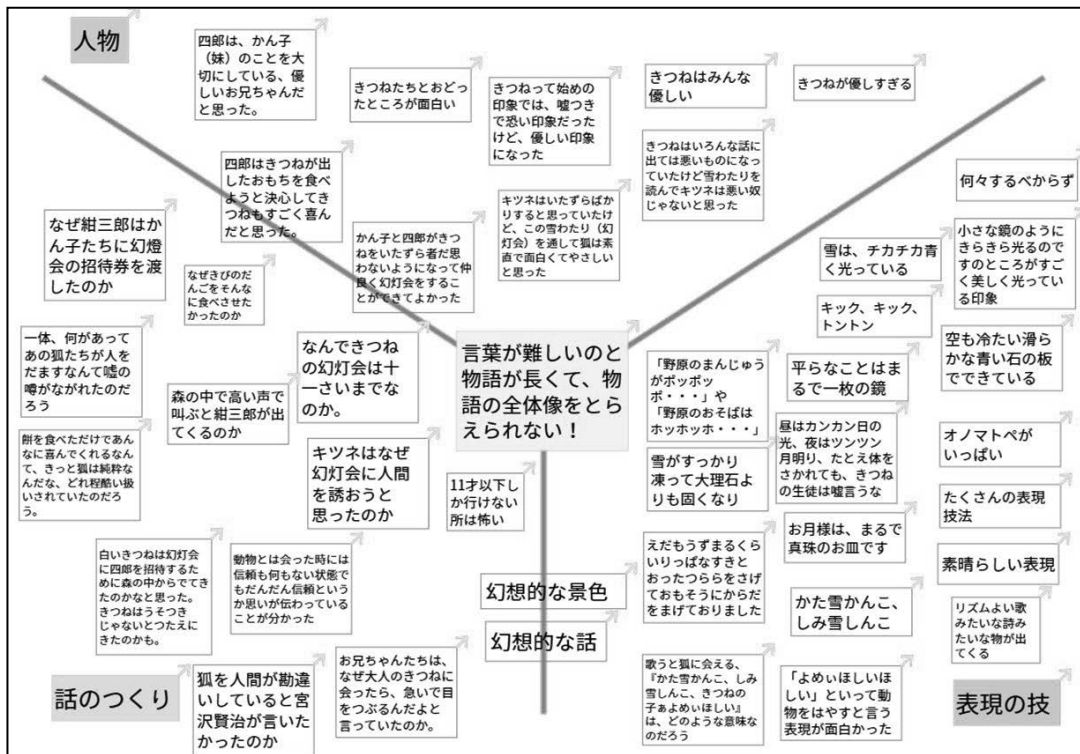
(続く)

印象に残った物語と、その理由を整理しながら、「雪わたり」について、「人物」「話のつくり」「表現の技」という三つの柱に分かれ、魅力を追究していくことを伝えた。そして、初読の感想を書いた。

② 第2時 初読の感想をもとに、学習の見通しをもつ

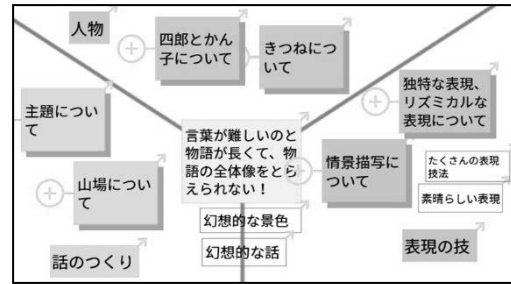
ICT機器を活用し、初読の感想を、「人物」「話のつくり」「表現の技」という三つの柱で整理したものを児童に示した。三つの柱をさらにそれぞれ、追究する魅力ごとに二つのグループに分けた。

「人物」	四郎とかん子について考えるグループ きつねについて考えるグループ
「話のつくり」	山場について考えるグループ 主題について考えるグループ
「表現の技」	情景描写について考えるグループ 独特な表現・リズムカルな表現について考えるグループ



【三つの柱で整理された初読の感想】

ICT機器を活用し、初読の感想を整理して追究する魅力を設定することで、児童が、自分の初読の感想をもとに、追究する魅力を選ぶことができるようにした。また、「話が長くて全体像を捉えきれない」「言葉が難しい」という感想も見られたため、その課題を克服し、物語の魅力を追究していくことを確認した。



【追究する魅力の設定】

③ 第3・4時 表現の工夫や効果を考える

魅力を追究する学習に入る前に、表現の工夫や効果を考える学習を行った。工夫された表現に着目し、そこからイメージされる様子を、ICT機器を活用して画像検索してカードを作る活動を行った。



【作成したカード】

児童は作成したカードを互いに見ながら、『『平らなことはまるで1枚の板のようです』って、本当にどこまでも歩いていけそう』などと話し合った。表現の効果については、「楽しい感じが伝わってくる」「場面の様子がくわしく想像できると思う」などと気付くことができた。

④ 第5時 「人物」「話のつくり」「表現の技」の三チームに分かれて読む

第6・7時 友達と話し合う

追究する魅力でグループに分かれて読む学習を行った。まず、一人で読み、読んでわかったことを同じグループの友達と共有した。わかったこと共有するだけでは考えが深まらないグループもあったため、それぞれのグループに話し合う課題を与え、考える活動も行った。

以下は、児童の一人読みやグループで共有・課題について話し合った結果などを、一部抜粋して示す。

ア 人物チーム 課題→登場人物の人物像や変化をまとめよう

(ア) 四郎とかん子について考えるグループ

「様子」について読んだ児童は、「きつねへの警戒心がない感じ」、「相互関係」について読んだ児童は、「四郎はかん子をお兄ちゃんらしく守っている。もっと上のお兄ちゃんも幻灯会に呼びたいと思っていた」ととらえていた。

(イ) きつねについて

「様子」について読んだ児童は、「紺三郎は、リーダー的な存在で、言葉も丁寧で礼儀正しい」ととらえていた。「気持ち」について読んだ児童は、「きつねは人間と仲良くしたいと思っている」ととらえていた。グループとしては、「紺三郎をリーダーとしたきつねたちは、何とか人間と仲良くなりたいと思っている」とまとめていた。

イ 話のつくりチーム 課題→山場はどこか考えよう

主題は何か考えよう

(ア) 山場について考えるグループ

「はじめと終わり」について読んだ児童は、「はじめ、きつねを怖がっていた四郎とかん子が、喜んできつねと一緒に踊るようになっていく」ととらえていた。「気持ちや心情の変化・きっかけ」について読んだ児童との考えの共有を通して、そのきっかけに、「もち」が深く関わっているのではないかと考えた。グループとして、「きつねは人間をだますと思っていた四郎とかん子が、きつねを信頼し、もちを食べたところが大きく気持ちが変わったところだと思う」とまとめていた。

(イ) 主題について考えるグループ

今まで主題について考えるという学習はしていなかったため、どのように読むとい  
いか、話し合ってから読む活動を始めた。登場人物の変化から感じるものが、物語か  
ら感じるメッセージを深くかかわっているのではないかという思いから、「気持ちや心  
情の変化・きっかけ」について読んでいくことにした。

「大人と子どもで幻灯会に行ける、行けないが違うのはなぜか」ということについ  
て話し合うことを通して、「四郎とかん子は、人間の大人から『きつねは人をだまらず悪  
いやつだ』と教えられたのではないか。」などと考えた。

ウ 表現の技チーム 課題→工夫された表現の効果を考えよう

(ア) 情景描写について考えるグループ

第3・4時よりたくさん表現に目を向け、表現の効果について考えていった。グルー  
プとして、「情景描写を用いることで、写真や絵を使わなくても、場面の様子を詳しく想  
像することができる」とまとめていた。

(イ) 独特な表現・リズムカルな表現について考えるグループ

「擬声語・擬音語・擬態語」「繰り返し」について読み、「リズムカルな表現によって、  
読んでいて楽しい、明るい気持ちになる。動物をはやしたてるような表現もあり、そうい  
った表現の繰り返しによって楽しい物語の雰囲気を出している」とまとめていた。

⑤ 第8・9時 「雪わたり」の魅力伝え合う

第8時では、課題が異なる人と考えを伝え合ったり、学級全体で共有したりした。「きつ  
ねは、人間の大人から嫌なことをされて、恨みに思っているのかもしれない。でも、人間  
と仲良くしたい気持ちもあるから、まだ純粋な子どもなら・・・と思って、四郎とかん子  
を幻灯会に招待したんだと思う」といった意見が出た。また、工夫された表現の効果につ  
いて、「情景描写やリズムカルな表現にも、その場面を見た人の気持ちが入っていると思う。  
登場人物が楽しい、うきうきした気持ちのときは、きれいな言葉や楽しくなる表現が使わ  
れている」「言葉で表現することで、一人一人が違う『雪わたり』の世界を楽しむことがで  
きる」という意見も出た。

共有の後、それぞれが思う『雪わたり』の魅力」をまとめ、伝え合った。振り返りでは、  
「物語の面白さに表現の面白さが加わってすごいなと思った。ちょっと内容が難しくても、  
子どもが読める話なんだと思った。次の図書推薦会でも、内容と表現の両方で紹介したい  
と思う」といった記述があった。

(4) 成果と課題 (成果：○ 課題：●)

- ICT機器を活用することで、場面の様子を具体的に詳しく想像することができた。
- 追究する魅力を設定して読むことで、一人一人が自分の考えをもったり友だちと考えを共有したりできた。
- 音の表現やリズムカルな表現など、画像で想像することが難しい表現もあった。
- グループで考えを共有し、読みを深めるには、話し合う課題を与えることが重要だと感じた。

(5) おわりに

ICT機器を活用することで、場面の様子を具体的に詳しく想像することができたり、追  
究する課題を設定することができたりした。また、自分と友だちの考えを比べたり、友だち  
の考えを取り入れたりしやすくなった。今後も、児童が自分の「読みたい」という思いにも  
とづいて読む学習の方法を研究したい。



## IV 第7 2次教研のまとめ

### 1 読み方教育

#### ① リポートの概要

目の前の子どもたちの実態を見つめた価値ある実践が多くみられた。何のために、あるいはどのように読む力をつけさせるべきか、報告されたりリポートをもとに討論が展開された。

#### ② 第7 2次教育研究愛知県集會に提出されたりレポートの傾向

〈読む活動を通して、どのような力を身につけさせるのか〉

〈読む力を高めるための教材の選び方について〉

子どもの主体性を高め、課題を自ら発見し、自分なりの方法で解決する力をつけさせるためにプロジェクト型学習の考えを取り入れた実践が報告された。また、習得した小説の読み方をもとに描写について考えることで読み深めたり、小説の描写や読みとったことを活用して自分の物語を想像的に書く活動を通して、実際の人間関係について考えを深めたりする実践が報告された。さらに、知識・技能を身につけたり、それを活用できるか検証したりするために教科書教材以外の物語を用いた実践や、子どもの実態に応じて、自主教材を開発した実践が報告された。

討論では、読みの力を国語の授業の中に留めるだけでなく、他の教科に生かしたり、実生活に還元したりすることの必要性について話し合われた。また、身につけさせたい力をとらえられることに加え、子どもが楽しいと思えることや、親しんで取り組めることなど、具体的な教材の価値について意見交換された。

〈読む力を高める指導の工夫について〉

子どもに適切な支援を講じるためにQ-Uを活用して実態を把握したり、対話活動を通してよりよい表現を検討したりする実践が報告された。ICT機器については、それを活用することで、意見を共有しやすくなることに加え、共有した意見をもとに自分の考えを広げ、深めることにつながる事例が報告された。また、ペア活動やグループ活動といった話し合いの形式に加え、ジグソー法やビブリオバトルなどさまざまな形態の対話的な学びのあり方が報告された。

討論では、ICT機器と従来の方法、それぞれの適切な活用の仕方や、集約したり、共有したりした子どもたちの思考をどのように修正し、還元していくか意見交換された。また、主体的に学ぶ子どもたちに対する支援の方法や対話活動における教師の立ち位置及び指導のあり方について話し合われた。

助言者からは、目の前の子どもに適した教材を選択することや教材の特徴にあった活用の場を設定することの必要性について指摘があった。読むことで自己の価値観を再構築できるもの、言葉やリズムの美しさを感じられるもの、習得から活用までつなげられるものなど、どのような教材を選択すべきかについて助言があった。

ルーブリック評価については、細かい基準が必要であるが、子どもにはわかりやすく再構成したものを提示するなどの工夫や、作成したものを絶えず子どもとともに作り直していくことの重要性が示唆された。

また、教師が一方的に教えるような、一律、一斉の学習ではなく、子どもたちが課題を発見し、自ら学びを作っていくために、子どもたちにとって切実で、現実的で、取り組みたいと思える課題やめあてを設定することの必要性について指摘があった。

さらに、確かな知識や技能を習得する場面、考えをもって言語化する活用の場面、自分の

立場から教材の意味や学びを再構築する活用の場面、新たな課題について探究的に学ぶ場面など習得・活用・探究を位置付けた授業展開の必要性について助言を得た。

### ③ 今後に残された課題

- 紙媒体による活動と一人一台端末による活動のよりよいバランス
- 学級に所属する児童・生徒全員が考えを形成し、対話に参加できるようにする工夫
- 自立した学習者を育てるための授業づくり

## 2 つづり方（作文）教育・音声表現の教育・言語の教育

### (1) 何のために何を

愛知の教研では、これまでに「人間形成にかかわる側面と言語の技術的側面は、一体化してのばしうる」ことが確認され、認識と表現の統一をめざしてきた。知識ばかりをつめこんだ人間ではなく、心の発達の間でも調和のとれた人間を育てることが大切である。そのために、身の回りの自然や社会、人とのかかわりをいろいろな視点から見つめてものの見方を深め（認識する）、ありのままに書いたり話したりする力（表現する力）を高めていかなければならない。また、書いたり話したりする活動には伝える相手が必要不可欠である。「何のために伝えるのか」「誰に伝えるのか」といった目的意識や相手意識をはっきりさせるための手だてや支援の方法を考え、書いたり話したりする活動への意欲を高めていくことが重要である。

### (2) 何をどのように

#### ① 作文教育

作文は「事実を書く」ことが大切であると考え。昨今、人間関係の希薄さが叫ばれているが、今後子どもたちはより高度な情報化社会を生きていくことになる。事実とは、そのような子どもたちが日々直面する事実のことであり、「事実を書く」とは、子どもたちが身の回りの自然や社会、人とのかかわりをありのままにとらえ、自分とのかかわりをありのままに書くことである。また、書きたいことを整理するために思考ツールを用いることが有効である。自分の考えを広げたり、相手に伝えたい情報を取捨選択したりするための手段として使い、子どもたちがより豊かに表現することができることをめざしていかなければならない。

#### ② 音声表現の教育

音声表現は、文字言語にはない特性（即時性・断片性・流動性・集団思考性）を生かして「認識と表現の統一」をめざす。そのためには、話したり聞いたりすることによってものの見方、考え方、感じ方が深まるような実践を行わなければならない。話し合い活動を通して、自分の思いを場や状況に応じてきちんと伝えられる力、相手の言いたいことをくみ取って聞く力を培うことが重要である。それが、互いを認め合い、思いやる子どもを育てることにつながる。話し合いの内容を深めるためには、話さずにはいられない状況をつくる必要がある。また、思いや考えを引き出すには、楽しい活動をめざして、流動性（相手の反応に応じて表現することができること）を重視するべきである。評価は、それを子どもの成長にどう還元するかを大切に、「何のための評価か」を明らかにしなければならない。

#### ③ 言語の教育

文字・文法・語彙・発音などの言語教育では、「日本語についての科学的・体系的な知識を身につける」ことをめざしている。ことばの構造や体系を知識として一方的に教えるのではなく、発見の喜びや過程を大切にすることが重要である。そして、日本語の性質や体系を生かした指導法の工夫をすべきである。特に他国籍の子どもたちへの言語指導では、実態を

的確にとらえ、語彙を増やすことや文の並び替えることなど、段階的な指導を意識していかなければならない。

## V 終わりに

今回行われた第72次教育研究愛知県集会（国語教育）では、提案レポートを中心とした熱心な討論が行われた。一つ一つの実践が、先生方の熱意あふれるものであり、今後の愛知の国語教育をさらに推進していくものだと感じられた。

さて、次期学習指導要領の施行が目前に迫っている。そのようななか、本年度の実践も、子どもたちの力を伸ばしたい、よりよい授業にしたいとの思いをもって積み上げられた実践ばかりであった。教師は、目の前の子どもたちが、授業でつけた力によって、どのような人生を送っていけるのかを思い描く。そのために、子どもたちの課題を把握し、どんな教材で、どのように指導するのかを追究する。それが、教研の実践のあり方である。そこに教科書があるから授業をするのではなく、そこに子どもたちがいるから授業を行う。目の前の子どもたちの姿を見つめ、どのように国語の力をつけさせ、それによってどのような子どもに育てていきたいのか。そのような願いがあってこそ、授業は確立していくものだと考える。

本年度、「文学・その他」「作文・その他」どちらにおいても、認識力を育てるための指導のあり方、そして、国語教育で身につけさせたい資質・能力、という点が討論の中心となっていた。それぞれの実践が、相互に補完し合うことで、国語教育の一つの目標である「認識と表現の統一」が、より円滑に行われていくと考える。

わたくしたちこそが、子どもを目の前にしている教育者なのだという思いを強くもちながら理論と実践を深め、豊かな教育をさらにすすめていきたい。今後も教研の実践が、愛知の国語教育の発展に寄与することを願う。